

(資料)

REFRANERO ESPAÑOL (40)

スペインの諺辞典

Bernardo Villasaniz* (ed.)

新井 藍 子**

1461. Quien tiene que le duele, cada día muere.

痛みがある者は 日毎に死ぬ

- 身体的に、或は精神的に苦しんでいる者は、救いのない絶望感で極度の窮地にまで追いやられてしまう。(バロス)
- 苦痛というものは、人を擲めとりそれ以外のことを考えさせない故に、全人格までが支配されてしまい自分が自分でなくなってしまうのである。

1462. Quien tiene una buena hora, no las tiene todas.

いつも吉日とは かぎらない

- よい事ばかりが続くものではないと戒めている。
- コレアス諺集では、標題の諺に続いて次の諺が見い出される；“Quien tiene una hora mala, no las tiene todas malas. いつも凶日とは、かぎらない” (悪い事ばかりが続くことはないと慰めている一筆者)，“Quien tiene una hora buena, no las tiene todas malas. 少しでも吉日があれば、凶日ではなかった” (たとえ悪い事が長く続いて、少しでも良い事があればそれによしと慰めている一筆者)，“Quien

* Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka.

** Profesora de español en la Universidad de Fukuoka (Facultad de Humanidades).

tiene una hora de espacio, no muere ahorcado. 少しのゆとりがあれば、首を絞められて死なずにすむ”（忙しさにストレスを感じて息もつけぬ状態をたとえて言う一筆者）など。

- 標題のことわざを日本の諺でいうと“楽あれば苦あり”，“苦あれば楽あり”，“楽は苦の種 苦は楽の種”，“禍福は糾える縄の如し”，“よい事の後には悪い”などであろう。

1463. Quien todo lo niega, todo lo confiesa.

全てを否定する者は 全てを告白している

- 訊かれた事に対してすべてを否定するというのは怪しい。本当の事を言うよりそのことにかかわりたくないという気持ちが見えみえだから。（パロス）
- スバルビィ諺辞典には次の異表現が見られる；“Quien todo lo niega, todo lo concede, o confiesa. 全てを否定する者は、全てを認めている、或は、全てを告白している”（何かに関わりがあると調べられている被疑者が全てを否定するのは疑わしい—スバルビィ）
- 多弁よりも沈黙を賞賛して“多言は一黙に如かず”，“言わぬ言葉は言う百倍”などと言うが、標題の諺では、言わぬ言葉が全てを告白していると言っている。両方の諺の主旨は違うが、一脈通じるころはある。

1464. Quien todo lo quiere, todo lo pierde, y no es conocido hasta que es perdido.

全てを欲しがると者は 全てを失う

そのうえ なくすまで その価値も知らない

- 欲張って一度は全てを手にしたが、全てをなくすまで持っていたものの本当の価値も知らなかったということ。
- 前半と後半から成り立っている。パロスによると前半は“La avaricia rompe el saco./ La codicia rompe el saco. 欲に頂きなし”（筆者の諺辞典、諺 115 を参照のこと）と同じ主旨の諺。
- コレアス諺集には、欲張りとは“Quien todo lo quiere, de rabia muere. 何でもかんでも欲しがると者は、憤慨して死ぬ”輩であるという諺が見られる。
- 同じ主旨の日本のことわざには“貪欲は必ず身を食う”，“欲は身を失う”などがある。

1465. Quien torpemente subió, más torpemente cayó.

へたに登る者は 登る速度よりも早く落ちる

- 不正、不当な手段で高い地位を得た者は、その地位に長く留まることは出来ないものだということ。
- 例題：セレスティーナ第1幕、おまえの御主人さまを騙してでも金もうけをしようともちかけるセレスティーナに従者がこう言う，“Riqueza deseo; pero quien torpemente sube a lo alto, más aína cae que subió. No querría bienes mal ganados. 財産は欲しいさ。へたに高い所へ登ったものは、登ったよりも早く落ちるものだ。俺はあこぎなやり方でもうけたくはないのさ。”(魔女セレスティナ, 大島正訳)
- “悪銭身に付かず”, “あぶく銭は身に付かぬ”などと同義のことわざ。

1466. Quien tras vallado va hablando, hijos ajenos va castigando.

垣根のうしろで噂話しをしている者は
よその息子に教訓を与えている

- コレアスによると, “塀に遮られているので, 誰も聞いていないと思って秘密の話とか, 他人のうわさ話しをしている者は, いつでも誰か聞き耳を立てている者がおり, それによってどれだけ本人が害を受けねばならぬかという教訓を他者に知らずに与えている。<castigar hijos ajenos は, よその息子に警告を与え, 説教する意>”
- スペインの諺には, すでに見てきたように陰で人の噂話しをしたり, 聞き耳を立てたりしている人を咎めているのが次のように多い; “El que escucha, su mal oye. 耳をそばだてる者は, 自分の悪口が聞こえる” (筆者の諺辞典, 諺 475 を参照), “En el que azogue, quien mal dice, mal oye. 市場で悪口を言う者は, 悪口を聞くようになる” (同諺辞典, 諺 539 を参照), “Entre seto y seto. no digas tu secreto. 垣と垣の間で, 秘密は話すな” (同諺辞典, 諺 567 を参照), “Escucha el agujerón oírás de tu mal y del ajeno. 穴に耳を押しあてる者は自分の悪口も聞こえる” (同諺辞典, 諺 579 を参照), 又, 次の諺では, 他人の言動の良し悪しを見て, 自分の行為を改めなさいと言っている; “Escarmentar en cabeza ajena, doctrina buena. 人のふりを見て, 我がふり直せ” (同諺辞典, 諺 577 を参照), “Es bienaventurado quien los

peligros ajenos hacen avisado. 他人の失敗を戒めにする者は幸せである”（同諺 577 を参照）など。

- “人の振り見て我が振り直せ”，“他山の石とする”，“人こそ人の鏡”と同義のことわざで，他人のよくない言動を見て，自分の振る舞いを反省し，改めよとおしえている。

1467. Quien trata en miel, siempre se le pega dél.

蜜を扱っていると いつも蜜がくっつく

- どんな事でも利益になるようなことに関わっていると，得をするものである，余録があるものであるということ。
- 同義のことわざには，“A quien miel menea, miel se le pega. 蜜をかきまわす者に，蜜がつく”（筆者の諺辞典，諺 87 を参照のこと），“El que anda entre la miel, algo se le pega. 蜜の中にいると，何かがかくっつく”（利が得られる環境に身を置くと，自然に余録が手に入る一筆者），“Quien tiene la cabra, ése la mama. ヤギを飼っている者が，乳を吸う”などがある。
- 標題のことわざの <dél は, de ella のこと>

1468. Quien viene a mesa puesta, no sabe lo que cuesta.

整えられたテーブルにつく者は
どれくらい大変だったか 分からない

- いつも人からサービスを受け，もてなされている者は，それに費やされた労力を正しく評価することができない。（パロス）
- 至極もったもなことわざで，同じような労力を払った者が，他者の労力を認め，感謝できるのであろう。

1469. Quien viene postrero, llega primero.

後の者が 先になる

- 後からきた者が先の者を追い越すこと。
- 同義のことわざには，“Los últimos serán los primeros. 後にいる者が先になる”，“Grulla trasera pasa a la delantera. いちばん後ろの鶴が，いちばん前にでる”（筆者の諺辞典，諺 624 を参照のこと）などがある。標題のことわざは，新約聖書

(マタイ19-30)の次の言葉からきている；“Pero muchos que ahora son los primeros, serán los últimos; y muchos que ahora son los últimos, serán los primeros. しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。”
(筆者の諺辞典、諺 624 を参照のこと)

- 同義の日本のことわざには“後の雁が先になる”，“後の鳥が先になる”，“後舟かえって先になる”などがある。

1470. Quien yerra y se enmienda, a Dios se encomienda.

罪を犯し悔い改める者は 神にその身をゆだねる

- 自分の過ちを自分自身で直す者を咎めるべきではない。(スバルビィ)
- 例題：セレスティーナ第7幕、何度も罪を犯すようなことをしているセレスティーナに向かってカリストの従者、パルメノが、一番悪い罪はいつまでも罪になるようなことをやることだと言い、標題のことわざの一部を言う、“:.....do dicen que : <quien yerra y se enmienda>, etcetera. 過ちを犯した者は後で改心するなどという諺もあるわけよ。”(魔女セレスティナ、大島正訳)

1471. Quien teme la muerte no goza la vida.

死を恐れる者は 人生を楽しまない

- 何か事を始めるのに、あれこれ支障になるようなことばかりを怖れて優柔不断になり、物事に積極的に取り組まない者をいう。(パロス)
- 旧約聖書では、“No temas a la muerte, que es tu sentencia; recuerda que lo mismo fue antes y será después. Este es el destino que Dios señala a todos los vivientes. 死の宣告を恐れるな。先に死んだ人と、後から来る人のことを考えよ。なぜお前は、いと高き方の御旨に逆らうのか。”(シラ書 41-3-4) と、われわれに神によりすでに定められた運命に逆らうなど諫められる。

1472. Quita la causa, quitarás el pecado.

原因を取り除けば 罪も取り除かれる

- 罪を犯す根拠になるような事柄がなければ、犯罪は起こらない。(スバルビィ)
“Quien quita la ocasión, quita el peligro. 機会を作らなければ、危険もない”と

同義のことわざ。確かに“La ocasión hace el ladrón. 機会は盗人を生む”の諺が
いうように、人というものは、時と場合によっては、何をしでかすか分からないもの
であるから、なるだけ犯罪の温床になるような原因をなくすのがいいということ。

- 例題：ドン・キホーテ第二部 67 章、故郷に帰って羊飼いにでもなるというドン・キ
ホーテに対してサンチョは、羊飼いに悪いのがいるし、羊飼いの小屋の中にも宮殿
と同じようによくない考えがあると、立て続けに言ういくつかのことわざの一つ、
“... y quitada la causa se quita el peligro ; 罪の芽は出ねうちに摘みとれだ。”
(続編三、高橋正武訳)

1473. Ratones, arriba, que todo lo blanco no es harina.

ねずみどもよ 白いものは 必ずしも粉ではないよ

- 外観で騙されないようにと警告している。
- コレアス諺集によると、この諺は、“猫が粉をかぶってねずみを騙そうとしたが、そ
の猫を見張っていた一匹の年寄りねずみはそのことに気がついて他の仲間知らせた”
というおとぎ話からきている。しかし、バロス諺集によると、騙そうとしたのは猫で
はなく、イタチがネズミを捕るために自分を粉まみれにしたと言っている。
- 同義の諺には、“No es oro todo lo que reluce. 光るもの、必ずしも金ではない”
(筆者の諺辞典、諺 1092 を参照のこと)、“No es todo oro lo que reluce, ni harina lo
que blanquea. 光るもの、必ずしも金ではない、また、白く見えるものは、必ずし
も粉ではない”(同諺 1092 を参照) などがある。

1474. Ratón que no sabe más que un horado, aquél tapado, presto le toma el gato.

ひとつの抜け穴しか知らぬ鼠は それが
塞がれたら すぐに猫に捕まる

- どんな危険であれ、それから逃れるために、唯一の手段、方法しか持たぬ者は直ぐに
その罠にひっかかってしまう。(スバルビィ) 新規の事業の企画を順調に運ぶため
には、ありふれた手を使うべきではない。ライバルが知ればすぐにでもその企画は潰さ
れてしまうだろうから。(バロス)
- 異表現が次のように見られる；“Ratón que no sabe más de un horado, presto le caça

el gato. ひとつの抜け穴しか知らぬ鼠は、すぐに猫に捕まる” (宝典, コバルビアス),
 “El ratón que no sabe más que un horado, presto es cazado, o al ratón que no tiene más que un agujero, presto lo pilla el gato. ひとつの抜け穴しか知らぬ鼠は、すぐに捕まる, 或は、ひとつの抜け穴しか持たぬ鼠は、すぐに猫に捕らえられる” (諺辞典, スバルビィ)

- 例題：セレスティーナ第7幕, セレスティーナがカリストの従者のひとりから頼まれて、女を次々とたくさんの諺を例に出して、男は持てば持つほどよいと口説く、そのうちの一つがこの諺である；“No hay cosa más perdida, hija, que el mur, que no sabe sino un horado. Si aquél le tapan no habrá donde se esconda del gato. ねえ、お前さんや、一つの穴しか知らぬ鼠より哀れなものはないね。そんな鼠はその穴を塞がれたら、猫から隠れる場所がなくなるだろうさ。” (魔女セレスティナ, 大島正訳) 注：“El mur que no sabe sino un horado <presto le toma el gato> 一つの穴しか知らぬ鼠は、 <すぐに猫に捕まる> という諺からきている。 <mur—ratón 鼠, horado—agujero 穴>—La Celestina, Bruno Mario Damiani, Cátedra. 注 317 より” “鼠” を意味する “mur” は、16 世紀まで文学の中に多く使われていた一筆者。

1475. Razón (La) no quiere fuerza, ni la fuerza quiere razón.

道理は 暴力を嫌い
 暴力は 道理を嫌う

- 正義を行うのに暴力が使われるほど合理に適わないことはない。
- しかし、一般的に世間で行われているのは、次の諺 “Los peces grandes se comen a los chicos. 大きな魚が、小さな魚を呑みこむ” (強者が弱者を踏みつけ、抹殺するのが世の常である。筆者の諺辞典, 諺 1278 を参照) が表わしているように、権力の前では道理など通用しないのである。
- この諺の論法を裏づけるようなことわざがこちらには次のように多くある；“泣く子と地頭には勝たれぬ” (聞き分けなく泣く子と、権力をもっている地頭には、道理を言っても勝ち目はない—故事ことわざ辞典), “童と公方人には勝たれぬ”, “主人と病気には勝てぬ”, “非理の前には道理なし”, “無理が通れば道理ひっこむ”, “長い物には巻かれる”, “殿の犬には食われ損”, “強い者には負けろ” など、道理とか、正当性

などは、自分より力が強いものの前では通用しないことを言う。

1476. Refregadas, duelen más las llagas.

擦れば 擦るほど 傷はもっと痛む

- 辛い過去とか、終わってしまった恋愛などは、思い出すべきではない。(バロス) 激しかった熱情を思い出すことを比喻している。(コレアス諺集)
- 類義の諺には“En casa del ahorcado no se ha de nombrar la sogá. 絞首刑になった者の家では、縄の名を言うな”(人の嫌がる話しとか、痛ましい古傷を思い出させるようなことはするなということ。筆者の諺辞典、諺527を参照)がある。

1477. Refranes (Los) son evangelios chiquitos.

諺とは 易しい福音書である

- 真実と人間の経験が内包されている諺を福音書に模している。(バロス)
- こうして数多くの諺を見てきて思うのは、諺というのは、誰もがよく知っている馴染み深い日常的な、時には、卑近な具体的な事柄を比喻に使って、誇張した、或は、意表をつくような表現で真実を鋭く突く簡潔でやさしい哲学の書とも、或は標題の諺がいうように、小さい福音書とも呼べるものである。諺の多くが旧約聖書から来ているという事実がそれを証明してくれるのである。ともかくわれわれにより良く生きていくための知恵と忠告を面白く易しく説き教えてくれるのが一番いい。すでに見てきた諺でも次のように述べている；“El que se viere solo y desfavorecido, aconséjese con los refranes antiguos. 一人っきりで、ひき立てのない者は、古いことわざを調べなさい”(筆者の諺辞典、諺504を参照)，“No hay refrán que no sea verdadero. 真実ではない諺はない”(同諺辞典、諺1145を参照)など。
- 筆者がこの“スペインの諺辞典”で、実際にスペイン文学ではどのようにスペインの諺が使われているかを見るために引用している二大文学書、“ドン・キホーテ”と“セレスティーナ”の作者、セルバンテスとフェルナンド・デ・ローハスは、それぞれ諺を人々の経験と思索から引き出された短い名言と考えている。また、両作家ともに深く諺を愛していることが、これらの文学作品からはっきりとうかがわれる。だから、キホーテ(セルバンテス)は、しばしば、田舎者のサンチョがでたらめに諺を並べ立てるのが我慢ならないのである；“...Que cuando comienzas a ensartar

refranes y cuentos, no te puede esperar sino el mesmo Judas, que te lleve. ことわざとでたらめを並べだしたら、おまえに乗りうつるユダでもなけりゃ、我慢できる者はおらんぞ。”(ドン・キホーテ, 第二部 19 章, 永田寛定訳) また、諺だけではなく、サンチョの間違った言葉使いにもとても手厳しい“—Fiscal has de decir—dijo don Quijote—; que no friscal, prevaricador del buen lenguaje, que Dios te confunda.<きびしいと言うんじゃ>と、ドン・キホーテ.<きびしいではない!よい言語のぶちこわし手め、神のお叱りをこうむるがよいわ!>”(ドン・キホーテ, 第二部 19 章, 永田寛定訳)

そして、この章では、セルバンテスが好むことばづかいが、サラマンカでカトリック教規を修めたという学士の言葉を通して語られるのである、これにより、何故セルバンテスが諺をこの作品で数多く用いたかが明白になる、そして、最も重要な事は、ここでセルバンテスが《ドン・キホーテ》で採用した文体の宣言をしていることである; “El lenguaje puro, el propio, el elegante y claro, está en los discretos cortesanos, 清らかなことばづかい, 正しいことばづかい, 品がよく, はっきりわかることばづかいは、頭のはたらく都ものにあるが, y la discreción es la gramática del buen lenguaje, que se acompaña con el uso. あたまの働きこそよいことばづかひの文法, というのは、使いならして、わがものにすることができるからです. ...y pícome algún tanto de decir mi razón con palabras claras, llanas y significantes. 言いたいことを, はっきりと, むずかしくなく, 意味のわかることばで述べることに, いささか誇りをおぼえる者です。”(ドン・キホーテ, 第二部 19 章, 永田寛定訳)

- ちなみに、現今のスペインの諺について、イリバレン (格言の由来) が “Refranero general ideológico español” (Luis Martínez Kleiser, Madrid, 1953) を引用して次のように述べている; “この本の作者は、スペインのいくつかの諺は、前半だけが残されて、後半部分は削除されていると、諺を例に上げて説明している; “Por dinero baila el perro (no por el son que toca el ciego). 金のためなら犬でも踊る (めくらが鳴らす音ではなく)” (筆者の諺辞典, 諺 1349 を参照のこと, ここでの後半はこうなっている <y por pan si se lo dan. もしパンを上げるなら>, <y salta por el cerco. 柵をも越える>, その他にもいくつかの異なったバージョンがある), “En todas partes cuecen habas (y en mi casa a calderadas). どこへ行っても恥

だらけ、(しかも私の家にはそれがいっぱい)”(同諺辞典, 559を参照), “Cada loco con su tema (y cada llaga con su postema). 誰でも自分の意見に固執し、(どんな傷にも膿がある)”(同諺辞典, 諺 194を参照, こういう後半部分もある, <y cada lobo por su senda. どんな狼にも通いなれた道がある>), “El buen paño en el arca se vende (mas el malo verse quiere). 上質の布は箱の中でも売れる(しかし, 悪い布は, 宣伝しなければならぬ)”(同諺辞典, 諺 158を参照)など。”

1478. Regostóse la vieja a los bledos, y no dejó verdes ni secos.

この野菜が すっかり好きになった老婆は
青いのも しなびたのも 残さず食べた

- 初めのうちは, 全然興味を示さなかったのに, 後になって必要以上に欲しがることをたとえていう。(コバルピアス)
- コバルピアス(宝典)によると, “bledos”とは, “よく知られている野菜で白色と赤色の二種類がある。胃腸を整えてくれる野菜で, 油, 水, 酢, 塩, 香辛料などで料理しないと, それ自体は美味しくない。”さて, 標題の諺は次の逸話からきている。“ひとりの老婆が, その野菜の品質を知っていたので, 最初は欲しがらなかったが, とても美味しく料理されていたその野菜をごちそうされ, すっかり気に入ってしまった。ごちそうしてくれた人にも分けようとしないで全部ひとりで平らげてしまった。それからというもの, その野菜を見つけてきては料理するようになった。”
- 異表現がまずスバルピィ諺辞典に “Avezóse la vieja a los berros y chupábase los dedos. その野菜に味しめた老婆は, 舌なめずりするようになつた”(いったん習慣になってしまった事を止めることはとても難しい—スバルピィ, berros—クレソン, chuparse los dedos—指をしゃぶる, 舌なめずりする<比喩的>), また, コレアス諺集に “Regostóse el asno a las berzas, no dejó verdes ni secos. キャベツが好きでたまらなくなったロバは, 青いのもしなびたのも残さず食べた”, “Regostóse el buey o avezóse el buey a las berzas, no dejó verdes ni secos. キャベツが好きでたまらなくなった牛は, 或は, 食べ慣れた牛は, 青いのもしなびたのも残さず食べた”が, それぞれ収載されている。
- “Regostarse”は, “afisionarse—好きでたまらなくなる, 夢中になる, 習慣になる”の意。

- 例題：ドン・キホーテ第二部 69 章、公爵夫妻から悪ふざけをしかけられるドン・キホーテとサンチョ、いつでも酷い目に会うのは、サンチョである、とうとう我慢できずにこう叫ぶ；“¿Qué tiene que ver manosearme el rostro con la resurrección desta doncella? Regostóse la vieja a los bledos. ...この娘がよみがえると、わしの顔に指しっぺえくわせると、なんの関係があるだ！つけあがるでねえだ。婆さんに小覷^{びゅ}じゃあるめえし！...”（続編三、高橋正武訳）

注 237：“婆さん小覷に味しめて、青いも枯れたも、残さず食べた”の意味で、一度味を知ると、とことん止めないこと。サンチョはここで前半だけを口に出している。— 高橋正武、前の諺 1477 で指摘されているように、この諺についても同じように、後半は省略されている。— 筆者

1479. Reinos y dineros no quieren compañeros.

王国もお金も 仲間はいらぬ

- 王国を治めるのも、金を管理するのも一人のほうがやり易い。
- 同義の諺には“El mandar no quiere par. 治めるのに、ふたりはいらぬ”がある。スバルビィによると、同等の立場で指揮する者が多いと、彼らの意見が合わない場合には、折角の機会を見逃してしまうことになるから。また、パロスによると、たくさんの人が所有する利益を管理するのは難しいということ。
- コレアス諺集には、異表現で“El reinar no quiere compañía, aunque sea de hijos. 治めるのに仲間はいらぬ、たとえ息子であろうとも”がある。

1480. Rey (El) es mi gallo.

王様が わたしの雄鶏だ

- 大物の支持を得ていることを自慢している。
- スバルビィによると、勝ったものになびき、負けて落剥の身になった者を袖にする変わり身の早さを言う、つまり¡Viva quien vence! 勝利者にバンザイ！ということ。
- 異表現には、すでに見てきた“Es el rey mi gallo; es el rey su gallo. 俺（彼）には、偉いやつがついてるんだ”（筆者の諺辞典、諺 514 を参照）がある。
- 類義の諺には“Más vale migaja de rey que merced de señor. 王様のパンくずは、殿様の引き立てに勝る”（たとえわずかでも、より勢力が大きい者の恩恵のほうが、

有益である、同諺辞典、諺 883 を参照のこと)

- 例題：ドン・キホーテ第二部 20 章、サンチョは、貧しいバシーリオより、金持ちのカマーチョをひいきにするとお得意の諺をだして言う；“—El rey es mi gallo; a Camacho me atengo. —En fin—dijo don Quijote—, bien pareces, Sancho, que eres villano y de aquellos que dicen: “¡Viva quien vence!” <王様がわしの雄鶏だ。わしゃカマーチョをひいきにするね><つまりな>と、ドン・キホーテが言った。<おまえは土百姓で、“勝つ者ばんざい！”と叫ぶ仲間、ということがよくわかるぞ、サンチョ>” (続編一、永田寛定訳) 注 196：<王様がわしの雄鶏...>は、闘鶏から出た語。ふたりの人が争う時、わきで見ている者は勝つと思う方、または、ひいきにする方を指すのに、だれそれがわしの雄鶏と言ったもの。—永田寛定
- どうせ頼るなら、より大きな力に頼れという“寄らば大樹の陰”とか“立ち寄らば大木の陰”などと、同様の主旨の諺である。

1481. Rey muerto, rey puesto.

王が死ねば 次の王が位に就く

- 何事もすぐに代わりが見つかるということ。
- 異表現には、“A rey muerto, rey puesto. 死んだ王の後に、新しい王” (筆者の諺辞典、諺 93 を参照のこと、前任者が行ってしまって空いた地位は、他の人によりすぐに占められる、或は、残された者の精神的な空虚さも、他の人により慰められる—マリア・モリネール、スペイン語辞書)、“Rey muerto, rey puesto; empero más vale el vivo que el muerto. 王が死ねば、次の王が位に就く；しかし、死んだ者より生きている者の方が偉い” (コレアス諺集) などがある。この諺は、後半の部分は現在省略されている。

1482. Rey nuevo, ley nueva.

新しい王に 新しい法律

- トップが変われば、新しい構想のもとに全てが変わるということ。
- 異表現には、“Nuevo rey, nueva ley. 新しい王に、新しい法律” (筆者の諺辞典、諺 1183 を参照のこと) がある。類義には、よく知られている“Allá van leyes do (donde) quieren reyes. 王が欲する所ならどこへでも法律は行く” (“強者の主張が法

となる、強いものが勝ち” —西和辞典) という古い諺がある。この諺は、コレアス(諺集)によると; “アルフォンソ 6 世 (León-Castilla 王, 在位 1072-1109) がトレドを征服した後 (1085 年), トレドの住民の反対にもかかわらず, それまでトレドで行われていたモサラベの儀式をカスティージャ, レオン両王国で慣行となっていた古代ローマ儀式に変えてしまった。そこから, <Allá van leyes, do quieren reyes.> という諺が生まれたのである。しかし, これより以前にすでにこの諺があったという可能性はおおいにあるが, 当時の出来事にあまりにもぴったりと諺が合ってしまったのでそう考えられたのであろう。” イリバレン (格言の由来) もコレアスと同じように, アルフォンソ 6 世の統治の頃か, 或はそれ以前にすでにあったという両方の推測を諺研究者を通して述べている。そして, こう付け加えている; “現在, トレドのカテドラルの美しい礼拝堂では, モサラベの祭式が守られていて, それを始めたのはシスネロス枢機卿 (Francisco Jiménez de Cisneros, スペインの枢機卿, 1436-1517) である。”

注: “モサラベ” とは, 8 世紀から 15 世紀末までのイスラム教徒支配下で, キリスト教信仰を保ったスペインのキリスト教徒である。礼拝で彼らが執り行ったのがモサラベ祭式である。9 世紀から 14 世紀にかけて, スペインの北部地方, 特にレオン王国では, 教会でモサラベ建築が開花した。—筆者

1483. Riñas (Las) de por San Juan son paz para todo el año.

聖ヨハネの祭日の口論は 一年間の平和のため

— 後になって疑問が残ったり, 紛争の種になったりしないように, 商売などの取引の際には, 条件をはっきりさせてよく話し合わなければならない。

(コレアス諺集, スバルビ諺辞典)

— スバルビによると, 聖ヨハネの日とは 6 月 24 日で, 当日は, 田舎で地主と小作人の間で農作業のための取り決めが行われていた。両者は, 条件をきちんと決めるために意見が合わなかったり, いらだったりとけんかになることもあった。しかし, 一度取り決めが成立すれば, 翌年まで両者は, 平穩無事に日を過ごすことができた。

— 例題: セレスティーナ第 8 幕, 仲間と仲違いしていたカリストの奉公人の一人がその仲間に向かって諺を言う; “Seamos como hermanos, ¡vaya el diablo para ruin! Sea lo pasado cuestión de San Juan, y así paz para todo el año. Que las iras de

los amigos siempre suelen ser reintegración del amor. 俺たちは兄弟分になろうや。くそっ、不仲のもとの悪魔なんかくたばれたい！昔のことは水に流せだ、そうすりゃ年がら年中いざござなしさ。友だち同志の腹の立て合いなんてものは、いつも新しい友情になるのがおちだよ。”（魔女セレスティナ，大島正訳）

注：“cuestión de San Juan—聖ヨハネの祭日”は、賃貸契約の開始，取り決め，成就の日であると慣習的に考えられていた。双方が契約条件の合意に達すれば一年間有効であった。—Bruno Mario Damiani, La Celestina, Cátedra

ここでいう“賃貸契約”とは、小作料を取って<払って>土地を貸す<借りる>ことを指すと思われる一筆者

- 両者が合意に達するまでは、お互いに不愉快な思いをしたり、いらだったり喧々囂々と、関係のない人が聞いていたらまるで喧嘩をしているように思ったであろう。そこから、標題の“riñas—口論，喧嘩”という表現が用いられたのであろう。ぴったりの日本の諺には“諍い果てての契り”，“雨降って地固まる”，“雨の後は上天気”，“嵐の後の凧”，“喧嘩の後の兄弟名乗り”など多数ある，最後の諺などは，例題に上げた奉公人のせりふと同じである。

1484. Riñen las comadres y dícense las verdades.

おばさんが喧嘩して 本当のことを言い合う

- 喧嘩をしたり，口論をしている最中は，今まで隠されていた欠点がむきだしになるのが常である。（スバルビィ）
- コバルピナス（宝典）は，標題の諺について次のようにコメントしている，“女というものは，怒っていても，いなくても秘密を守ることはできない”と。確かにそういう女もいる。一般的に，誰でも興奮すると本性がでるものである。同宝典には，こういう諺もある，“Mal me quieren mis comadres, porque les digo las verdades. 本当のことを言うから，身内はわたしを嫌っている”（筆者の諺辞典，諺 804 を参照，この諺には後半がこう続く“me quieren mis vecinas porque les digo las mentiras. 嘘を言うから隣の人はわたしを好いてくれる” —筆者）
- コレアス諺集には，類義で“Riñen los ladrones, y descúbrense los hurtos a voces. 泥棒が喧嘩して，大声で盗みをばらし合う”（怒りや憎しみで自分の欠点があらわになったり，相手を傷つけたりする—筆者），“Riñen los ovejeros, y perecieron los

quesos. 羊飼いが喧嘩して、チーズが駄目になった”などがあり、また、こういうものもある “Riñen los amantes, y quiérense más que antes. 恋人同士が喧嘩して、前よりもっと好きになった”, バロス諺集には, “Riñas de enamorados, amores doblados. 恋人同士の喧嘩, 倍になった愛情”, “Mal me quiere y peor me querrá al que dijere la verdad. わたしをよく思っていない人がいる, 本当のことを言っただらもっと憎まれるだろう”(筆者の諺辞典, 諺 804 を参照) などの諺が収載されている。

- 例題: セレスティーナ第15幕, 相手の取り分を分けようとしめない貪欲なセレスティーナを指してこう言う, “...y decir que todo era suyo lo ganado, y aun descubriendo otras cosillas de secretos, que, como dicen: <riñen las comadres>, etcétera. 儲けは全部じぶんのものだと言ったのよ。おまけに, 諺にもあるように, おばはんの喧嘩がもつて, 本音がでたといったようなもんでさ, ...”(魔女セレスティーナ, 大島正訳)
- こちらの類義の諺には “物数言えば屑が出る” がある。“屑” は, あら, 欠点の意味で (故事ことわざ活用辞典), 口数が多いと, 自分の欠点があらわになったり, 相手を傷つけたりするものである。

1485. Río (El) pasado, el santo olvidado.

川を渡れば 聖人を忘れる

- 危険がいったん過ぎれば, 恐れていた時にした誓いの言葉なんか忘れてしまうということ。(バロス)
- 同義には “El peligro pasado, el voto olvidado. 災難過ぎれば, 誓願も忘れられる”(筆者の諺辞典, 諺 1282 を参照のこと) がある, 類義の諺には “Entretanto que cría, amamos al ama; en pasando el provecho, luego olvidada. 育ててしまえば, 乳母を忘れる”(必要がなくなると, 忘れてしまう恩知らずをいう, 筆者の諺辞典, 諺 568 を参照のこと), “Pasado el tranco, olvidado el santo. 敷居をまたげば, 聖人を忘れる”(過ぎてしまえば, 恩を忘れるということ, 同諺辞典, 諺 1282 を参照) などがある。
- ぴったりの日本の諺には, すでに見てきたように “喉元過ぎれば熱さを忘れる”, “病治りて医者忘る” など, まだその他多数ある。

1486. Riquezas (Las) son poderosas de soldar muchas quiebras.

富は たくさんひびをも つなぎ合わせる

- 富は、何でもすることができる。時には、正義の杖をも折り曲げることができる。
(スバルビィ)
- 同義の諺は、すでに見てきたように多数ある；“El dinero es caballero. 金持てば殿様”（筆者の諺辞典、諺 420 を参照のこと），“Don Dinero es gran caballero. 金は、偉大な紳士である”，“El dinero hace lo malo bueno. 金は悪いこともよいと見なす”，“El dinero todo lo puede y vence. 金は、何でも出来るし、何でも打ち負かす”，“Poderoso caballero es don dinero. 勢力のある紳士は、金である”（同諺辞典、諺 1339 を参照のこと）など。
- 例題：ドン・キホーテ第二部 19 章、百姓どうしだが、とても豪勢な婚礼が見られるという、美しい花嫁キテリアの系図は、花婿カマーチョのより上だそうだが、そんなことを気にかける者は誰もいませんと、学士がドン・キホーテに言う、なぜなら、“...que las riquezas son poderosas de soldar muchas quiebras. En efecto, el tal Camacho es liberal y...富は、ひびだらけの物にも、鍔掛けを利かせられるんですからね。じっさい、いま言ったカマーチョは豪勢です。”（続編一、永田寛定訳）
- 日本の諺にも、金の力がどんなに強いかを謳っているものが多い、まず、よく知られているのは“地獄の沙汰も金次第”，“金の光は阿弥陀ほど”，“金が物言う”，“金が言わせる旦那”などであろう、その他にも“金さえあれば飛ぶ鳥も落ちる”，“成るも成らぬも金次第”，“知らぬ道も銭が教える”など、金さえあれば、世の中の事はすべてどうにでもなると言っている。

1487. Risa (La), del conejo, y música del cisnero.

兎の笑い 白鳥の歌

- スバルビィ（諺辞典）によると、“La risa del conejo—兎の笑い”とは、兎が死ぬ前に顔を痙攣させるように、人が死ぬ前に口の辺りをひくひくさせたり、或は、顔のどの部分でも痙攣させる時に言う。また、人がとても苦しんだり、悩んだりしているにもかかわらず、無理に作り笑いをしようとして顔が痙攣したような様子になることをもいう。

- コレアス (諺集) によると、料理の皿にのってだされた兎は、歯をむきだして、まるで笑っているようである。
- イリバレン (格言の由来) によると、“El canto del cisne—白鳥の歌”とは、今日では、誰もが白鳥は歌わないことを知っているが、白鳥は死ぬ前に非常にやさしい、耳に心地よい歌をうたうと文学的、詩的に言い伝えられている。
- スペイン王立アカデミー辞書：“risa de conejo” —作り笑い (口語的表現)，“canto de cisne” —最後の作品 (業績)，絶筆

1488. Rogar a Dios por los santos, mas no por tantos.

良いことでも 神様に お願いするのは
ほどほどに

- 物事は、たとえ有益なことであっても、度を超すと害を与えることがあるのでほどほどにしろということ。(スバルビィ)
- コレアス諺集には、異表現 “Rogamos a Dios por santos, mas no por tantos. 良いことでも神様にお願いするのは、ほどほどに” が、スバルビィ諺辞典には、“Rogar a Dios por santos, mas no por tantos. 同訳” (欲するものがどんなに有益な事でも度を超すとかえって悪くなる—スバルビィ) が、それぞれ収載されている。
- 論語の“過ぎたるは猶及ばざるが如し”と類義の諺で、物事には程度というものがあり、度を超えたものは足りないものと同じようによくないということ。同義の諺には、次の一連の諺“薬も過ぎれば毒となる”，“分別過ぎれば愚に返る”，“礼も過ぎれば無礼になる”，“念の過ぐるは不念”などがあり、たとえ良いことであろうとも度を超すとかえって支障をきたしたり、有害となると言っている。

1489. Ropa (La) sucia, en casa se lava.

汚れ物は 家の中で洗う

- プライベートな事柄は、公にすべきではない。(パロス)
- 異表現には “La ropa sucia debe lavarse en casa. 汚れ物は、家の中で洗わなければならぬ”がある、同義の諺には、“Llorar a boca cerrada y no dar cuenta a quien no se le da nada. 口を閉じて泣きなさい、何もくれない人に気づかれぬように” (不幸なこととか、身内の恥などは、出来るかぎり外にもらすべきではない。特にわ

れわれの苦痛には無関心な人々に対しては隠すべきである—バロス、筆者の諺辞典、諺 783 を参照のこと）、“*Quémese la casa sin que se vea el humo. 煙りが立たないように、家を燃やせ*”（不幸な出来事とか不名誉な事件は、当事者以外には、できるかぎり知られないようにすべきである—バロス、筆者の諺辞典、諺 1384 を参照のこと）などがある。

1490. Rueda (La) de la fortuna nunca es una.

浮き世は 廻る水車

- 世の中の移り変わりの激しさをいう。
- コバルビアス（宝典）によると、“*La rueda de la fortuna—運命の車輪*”は、たとえしっかりと釘で手許に止めておいても充分とはいえないほど、不安定である。
- そのように人の世も不安定であるということで、同じように日本の諺には、有為転変、無常観、人事の変転を謳ったものが多い；“昨日の淵は今日の瀬”、“昨日の花は今日の夢”、“驕る者は久しからず”、“むくの花—日の栄”、“三日見ぬ間の桜かな”などがあり、人生のはかなさ、人の盛りは長く続かないことなど、ものあわれを言い表している。
- 例題：ドン・キホーテ第一部 47 章、ドン・キホーテが檻へ入れられ、牛車に乗せられた章で、今ごろはもう、伯爵になっているはずなのに、こうして馬の口とりになって村へ帰らなければならぬ運命を嘆いてサンチョ、“*...: que la rueda de la Fortuna anda más lista que una rueda de molino, y que los que ayer estaban en pinganitos hoy están por el suelo. 運命の車は粉屋の車より回りが早い。きのう天辺にいた者がきょうはどんぞこだってね。*”（続編三、永田寛定訳）

1491. Ruin con ruin, que así se casan en Dueñas.

似合い似合いの釜の蓋

- 似た者同士が結婚すること、或は、どんなに惨めな者であろうとも似合う連れは必ずいるということ。
- 直訳すると“ドゥエニャス村では、みずばらしい者同士が結婚する”
コバルビアス（宝典）によると、この村は、旧カスティーリャ地方にある。標題の諺が“宝典”には“*Ruyn con ruyn, que assí casan en Dueñas*”として収載されて

いる。コバルピアスは、次のようにコメントしている；“結婚する者にけちをつけることができない時に皮肉ってこの諺が使われる。実際に Dueñas 村で結婚する者に対しては、諺が言っているのとは反対の意味がこめられている。というのは、フェルナンド王の二度目の結婚式が、この村で 1506 年 3 月 18 日、月曜日、大天使ガブリエルの祭日に執り行われたからである。”また、コレアス（諺集）も次のように言っている；“この村では、お互いによく知っている似た者同士が結婚する習慣があった。この村の出でない口さがない人々が嫉妬からこの諺を作ったと思われる。この村の者同士の結婚は、侮蔑の対象になるよりも名誉なことであった。なぜなら、フェルナンド王がここで結婚したからである”

- 同義の諺がスペインにも日本にも多数ある；スペインで一番よく知られているのが “Cada oveja con su pareja. 羊は羊の連れ（牛は牛連れ、馬は馬連れ）”（だれにでもその人に似合った結婚相手がいる、筆者の諺辞典、諺 196 を参照）で、以下 “Todas las aves, con sus pares, o todas las aves buscan, sus iguales. 鳥にも似合いのつれ、或は、どんな鳥も似合いのつれを探す”，“No hay olla tan fea que no halle su cobertera. 破れ鍋に綴じ蓋”（同諺辞典、諺 1138 を参照），“Nunca falta un roto para un descosido. 破れ鍋に欠け蓋”（直訳一布のほころびには似合いの破れ、同諺辞典、諺 1188 を参照），“Para cada altar hay su frontal. どんな祭壇にも、似合った掛け布”（ふたりの不器量な似た者同士が結婚することをいう、同諺辞典、諺 1257 を参照のこと）などがある。